

それは六十日周期で訪れる。

どこからともなく湧き出てくる群勢——それは人の姿こそしているものの、まるで感情というものが無かった。

誰にどのような目的で造られたのかも全く不明である、その奇妙なキカイの群勢は、子をさらい、時として殺戮を行い、世の人々を恐怖させた。当然の如く、人々はそれらと対立するにいたったが、謎のテクノロジーの集結体に人類は成す術もなく、せいぜいできることといえれば六十日周期のその日の夜に、大人たちが寝ずに見張るくらいであった。

虫の守護システムをその筐体に宿すこのキカイは、シトメージと自らを名乗ったことがあるという。人類の文明が進歩し、歴史とオカルティズムの中にその存在が埋もれていった現在においても、シトメージの脅威はなくなるならない。彼らもまた、独自の文明を築き、進歩しているのである。